

# 探討川端文學的救贖性 —以掌中小說「習性的解脫」為中心—

黃翠娥

輔仁大學日本語文學系 教授

## 摘要

川端文學常被視為充滿虛無感，以此虛無感昇華為傳統的美意識，因而建構了獨特的文學世界。而本研究是從上述這個主流論點轉向，關注到川端文學的救贖性質。例如，如何從天災中找回希望，或者是從對親人的死亡的悲傷中找到撫慰。而本研究要從日常生活中尋找。例如如何擺脫社會制約、習性。本研究特別鎖定川端作品中的短篇作品(掌中小說)作為探討的對象。理由是川端作品中掌中小說為數眾多，且在習性的糾纏及與之的戰鬥上，都可以從掌中小說顯露出來。

本研究特別挑選在大正末期到昭和初期的 9 篇作品，分為「從家庭與土地中解放出來」及「從生活習性解脫出來」等兩個方向來進行分析。而此文學主題與川端文學的理念有何關聯性也是本研究的探討重點。其一自然是已成研究主流的「萬物一如・輪迴轉生」的思想，再者是川端所主張的當代小說的意義，最後則是川端文學中對社會議題的回應方式。

關鍵字：川端文學，救贖性，習性的解脫，掌篇小說，萬物一如・輪迴轉生

受理日期:2022 年 08 月 31 日

通過日期:2022 年 10 月 25 日

DOI: 10.29758/TWRYJYSB.202212\_(39).0009

**Exploring the Redemption of Kawabata Literature  
: Focusing on the Palm-of-the-Hand Stories "The  
Liberation of Habit"**

Huang Tsui-O

Professor, Department of Japanese Language and Culture, Fu Jen  
Catholic University

Abstract

Kawabata literature has often been regarded as full of nothingness, which has been sublimated into a traditional sense of beauty, and thus has constructed a unique literary world. This study turns from this mainstream argument to focus on the redemptive nature of Kawabata's literature. For example, how to find hope in a natural disaster, or to find comfort in the grief over the death of a loved one. This study, however, looks at everyday life. For example, how to get rid of social constraints and habits. In particular, this study focuses on the Palm-of-the-Hand Stories in Kawabata's works. The reason for this is that there are many of these novels in Kawabata's works, and the entanglement and struggle with the habit can be revealed in the novels.

The nine works were selected for analysis in two directions: "Freedom from the family and the land" and "Freedom from the habits of life. The study also focuses on how this literary theme relates to the philosophy of Kawabata literature. The first is the idea of "everything is the same and reincarnation" that has become the mainstream of research, the second is the meaning of contemporary fiction as advocated by Kawabata, and the last is the way Kawabata's literature responds to social issues.

Keyword: Kawabata Literature, Redemption, The Liberation of Habit,  
Palm-of-the-Hand Stories, All thing as one and Reincarnation

# 川端文学の「救済性」について 一掌の小説における「因習の解脱」を中心に一

黄翠娥

輔仁大学日本語文学科 教授

## 要旨

川端文学は虚無感に富んでおり、その虚無感をさらに伝統的な美意識に昇華されて独特な文学世界を構築できたとよく見なされる。本研究は以上の主流的な論点から転じて、川端文学の救済性に重点を置くことを目的とする。具体的に言えば、「因習の解脱」という、如何に人生の様々な束縛から抜け出せるかという議題について探ろうとするものである。大正 14 年から昭和 4 年ごろまでの作品を中心に、9 篇を選び出して探究することにする。そして、「家庭・土地からの解放」と、「制度概念からの解脱」という二つに分類して、川端はどのような「因習」に目を付けて、どのようにして、そこから解脱するかと探究したいのである。

最後は、この「因習の解脱」と川端の思想との関わりにも触れたい。それは、もっとも主流的な観点の「万物一如・輪廻転生」という思想のほかに、小説の現代的意義と「救済」との関連性、社会問題の捉え方という三つの角度から掌の小説における「因習の解脱」の在り方を論じたのである。

キーワード:川端文学、救済性、因習の解脱、掌の小説、万物一如・  
輪廻転生

# 川端文学の「救済性」について

## 一掌の小説における「因習の解脱」を中心に

黄翠娥

輔仁大学日本語文学科 教授

### 1.はじめに

川端康成は幼少年期に肉親を相次いで亡くすという不幸に見舞われたため、作品は虚無感に富んでおり、その虚無感をさらに伝統的な美意識に昇華されて独特な文学世界を構築できたとよく見なされる。こうした視点は、虚無感の起源や意味合い、そこから生まれる美意識の意味合い、日本文学における位置づけなど、川端の文学研究の主流の方向性を示している。本研究は以上の主流的な論点から転じて、川端文学の救済性に重点を置くことを目的とする。即ち、川端文学は、この世に生きる者にどのような救済を与えてくれるのだろうかという趣旨である。具体的に言えば、「因習の解脱」という、如何に人生の様々な束縛から抜け出せるかという議題について探ろうとするものである。

筆者はかつて、川端が関東大震災を背景にした作品の中で、「因習解脱」を実践することで震災の不幸を免れたことを発表した。<sup>1</sup> 本研究では同じ「因習解脱」という議題ではあるが、大きな災難の代わりに、日常茶飯においての様々な束縛からの解脱に絞ろうと思う。そこで、川端の掌の小説を探究対象にしたい。掌の小説に絞った理由は一つに川端が掌の小説の名人だという理由は勿論であるが、もう一つには掌の小説の数が夥しいことから、たやすく川端の思想を探り出すことが出来ると考えたからである。即ち、掌の小説における要素は川端文学の底流的な存在だと言っているからである。しかし、もっとも肝心な理由は、むしろ掌の小説からの方が因習との葛

---

<sup>1</sup> 黄翠娥「川端文学における『救済』--関東大震災関連作品をめぐって--」(『台湾日語教育学報第37期』、2021.11)pp.150-173

藤及び因習に対する退治という趣旨がより顕著だからである。

## 2. 先行研究

### 2.1 掌の小説について

掌の小説について、松阪俊夫氏<sup>2</sup>は、川端文学には掌の小説は合計126篇ぐらいあり、400字の原稿用紙が7枚前後をピークとして、短いのは1枚余で、長いのは16枚余の極めて短い小説だと定義している。さらに、この川端が22歳から65歳の長きに及んで書いた掌の小説は作者自身の資質を生かすにもっともふさわしい創作形態として書き続けられていて、もっとも独自性を持っている小説形式だという。森晴雄氏は『「掌の小説」論』<sup>3</sup>において、多くの作品を取り上げて、作品の主旨についての探究以外に、作品に書かれた背景、特に当時の他の作家との関わりにも深く触れている。この著作の観点はもっとも示唆的になっても、本研究の因習からの解脱という主旨探究とはそれほどかかわっていないのである。また、川端文学研究会によって編集された『論集 川端康成一掌の小説』<sup>4</sup>は、35篇の作品を対象にして論究している。この35篇の中で、本研究で取り上げた作品と重なったのは3篇である。後文で作品分析した時、この先行研究の観点を対照しながら、本研究の主旨を闡明しようと思う。それから、台湾における掌の小説の研究と言えば、張月環氏によるものがある。ただ、張氏は美の原型、新感覚派の技法という創作技法に関心を置いていると同時に、金銭と子供との関係という趣旨にも目を付けている<sup>5</sup>ために、本研究とは違う研究方向だと言える。

---

<sup>2</sup> 松坂俊夫「掌の小説――研究への序章」(『川端康成「掌の小説」研究』、教育出版センター、1983.10。 pp.2-4)

<sup>3</sup> 森晴雄『川端康成「掌の小説」論--「心中」その他』(1997.4)、『川端康成「掌の小説」論--「貧者の恋人」その他』(2000.11)、『川端康成「掌の小説」論--「雨傘」その他』(2003.11)、『川端康成「掌の小説」論--「日向」その他』(2007.12)、龍書房。

<sup>4</sup> 『論集 川端康成一掌の小説』(川端文学研究会編、おうふう、2001.3)

<sup>5</sup> 張月環『「掌の小説」における川端文学の探究』(致良出版、2019.7) pp.14-170

## 2.2 因習からの解脱について

本研究の主題の「解脱」についての先行研究では、小林芳仁氏は「川端文学と仏教」<sup>6</sup>のなかで、川端康成と仏教との因縁、特に万物一如・輪廻転生思想への展開、無の頌歌及び仏教的な諦念などの要素に触れている。特に本研究との関連では、思想の因習、感情の因習への破壊という点において同じ方向性を持つと言える。ただ、小林氏のこの文章では、死の超越と無の賛美などに重点が置かれていて、思想・感情の因習への破壊の面では、あまり作品分析がなされていない。したがって、まだ、研究の余地が残ると言えるだろう。

また、羽鳥一英氏による万物一如・輪廻転生思想に対する探究<sup>7</sup>は掌の小説及び因習からの解脱の両方の探究を兼ねたものであり、本研究にとってはいい示唆になる。例えば、羽鳥氏は他の分類を参考にしながら<sup>8</sup>、自分の意見を入れて、掌の小説の主旨を家庭からの解放、無貞操の美、野性への憧れ、土地からの解放、コスモポリタニズム、神秘的なもの、自伝的なものなどと分類している。この中で家庭からの解放、無貞操の美、土地からの解放、コスモポリタニズムなどはまさに因習からの解放だと締めくくることが出来ると思う。しかし、登場人物の振る舞いはどのように因習から解脱をしたかについては、実際の作品分析が欠けている。

## 3. 掌の作品における「因習からの解脱」

前述したように、「因習からの解脱」というのはどのように人生のいろんな束縛から抜け出せるかということを目指すものである。「因習解脱」の実践は掌の小説においては特に顕著である。

このテーマは川端の全生涯に渡って関心を注いだ主題であるが、

---

<sup>6</sup> 小林芳仁『美と仏教と児童文学と—川端康成の世界』(双文社、1985.12) pp.85-114

<sup>7</sup> 羽鳥一英「川端康成と万物一如・輪廻転生思想」(『日本文学研究資料叢書 川端康成』、有精堂、1980.10)

<sup>8</sup> 川端も「獨影自命」で作品の自作自解として、「神秘的なもの」、「無貞操の美しさ」、「野性のあこがれ」などの分類をした。(「獨影自命」、『川端康成全集 第三十三巻』、新潮社、1983.8。pp.467-471)

川端の「獨影自命」によれば、掌の小説の大半は二十代に書いたものであり、年代としては大体大正 11 年から昭和 7 年までの 11 年間のものであるという。<sup>9</sup>したがって、特に本論のテーマに属している作を大正 14 年から昭和 4 年ごろまでに絞って、9 篇を選び出して探究することにする。具体的には、「二十年」（大正 14）、「海」（大正 14）、「夏の靴」（大正 15）、「雀の媒酌」（大正 15）、「馬美人」（昭和 2）、「故郷」（昭和 3）、「家庭」（昭和 3）、「母国語の祈祷」（昭和 3）、「離婚の子」（昭和 4）である。即ち、大正の終わりごろ及び昭和の始めごろというこのテーマのもっとも盛んだった時期である。

これらの作品を俯瞰してみれば、「家庭・土地からの解放」という趣旨が多いことが分かる。しかし、もっぱら因習からの解脱だとは一言で締めくくられきれないため、本研究では、「家庭・土地からの解放」と、「日常茶飯事の因習からの解脱」という二つに分類して探究したい。

### 3.1 家庭・土地からの解放

#### 3.1.1 「海」<sup>10</sup>

羽鳥一英氏によれば、「海」はコスモポリタリズムという主題に属している作である。<sup>11</sup>これはもっともな定義だと言える。ストーリーの時間は 7 月に設定されている。約 70 人の朝鮮人グループが 3 年かけて峠までの新しい道を切り開く土木工事をしていて、やっと峠にたどり着き、道を掘る作業は終了した。一人の十六七の少女が峠に着いて海を見たとき、「私腹が痛い。歩けない。」と言って荷物を下して草の上で休んでいた。そして、後から後から通りすぎていく他の労働者たちに「後から皆が来るかしら。」「まだ後から誰か来るかい。」(p. 72)と聞き続けたが、そして、最後の一人となった若い土方

---

<sup>9</sup> 同注 8。p.461

<sup>10</sup> 「海」（『文藝時代』1925 年第二卷第十一号。初めは「朝鮮人」と題されて掲載された。昭和 25 年刊行された十六巻本の『川端康成全集』において、「海」と改題した。『川端康成全集 第一巻』、新潮社、1983.8)

<sup>11</sup>同注 7。p.275

が通りかかり、声をかけてくれた。もう後ろに労働者はいないから、俺とここに残って夫婦になれと説得され続けた。

少女は「俺と夫婦になれ」と言われた時、「いやです。---父が言った。俺が殺された土の上で結婚するな。内地に来てゐる奴のお嫁になるな。朝鮮へ歸ってお嫁に行け。」(p. 73)ときっぱり断った。すると、若い土方に「ふん。だからお前の父はあんな死さまだ。」と冷たく言い返された。結局少女は「私に海が見えないやうにして連れて行つてね。」(p. 74)と、父親の、朝鮮に戻れという期待を裏切り、若い土方の、日本に残るという提案に同意した。

全体から見れば、無力感や悲哀感が滲んでいることは否定できない。しかし、だからこそ、これは川端文学の救済の働き-因習の解放-による逆境の克服だと言えるだろう。

### 3.1.2 「馬美人」<sup>12</sup>

「馬美人」は馬美人という十六歳の男っぽい娘を主人公にした作品である。父親は妾と村外れの家に住んでおり、自分は母親、馬と一緒に住んでいる。馬美人は声は男のように太く、荒い声であり、行動もだんだん男っぽくなってきた。例えば、母親と水田に出ていて、水田を深く耕すことが出来なかった母親に対して、「馬鹿つ！」とその頬を平手で打った。「何をしてやがるんだい。水を撫でるんぢやない、土を掘り返すんだ、土を。」(p. 183)と怒鳴った。その後、父親は借金に苦しんで、馬美人と母親の家、馬などをすべて人手に渡すことにした。それで、母親は妾と別れた父親のところへ行くことにした。このことに対して、馬美人はぺっと寝ている母親の腹に唾きを吐きかけた。そして、裸馬に乗って、流星のように南野山へ飛んでいった。馬美人の行方について、村人と母親と父親はそれぞれの見方をした。

「馬美人」では娘は家庭の主宰者でありながらも、家族や村に囚

---

<sup>12</sup> 「馬美人」(『文藝春秋』、1927年5月号。『川端康成全集 第一巻』、新潮社、1983.8)。森晴雄はこの作品は樋口一葉の「にごりえ」に触発されて書かれたものだと指摘した。(『「掌の小説」論--「貧者の恋人」その他』、2000.11。pp.25-28)。



われないように、未練なくその家庭を脱出してしまうという経緯を語っている。と同時に、娘の潑刺たる言動も鮮やかに描かれている。このような激しい性格の女性は川端の作品群にはよく出てくる。例えば、「南方の火」の弓子、「浅草紅団」の弓子、「空に動く火」のお花、「温泉宿」のお滝、「伊豆温泉記」の娼婦などである。また、母親の、父親への従順な態度に対する反感はフェミニズムの匂いもする。このように様々な作品解釈があるが、未練なく、自分の家、村を離れたことこそもっともクローズアップされた点だと言えるだろう。

### 3.1.3 「故郷」<sup>13</sup>

母親は東京の姉娘のお産の手伝いに行っている、一人になった十二、三歳の男の子の主人公は、家主にでもなったかのように家を貸し出したり、家の物を売ったりして、東京への旅費を貯めようと努めた。ようやく旅費が出来たので、切符を買って東京に出かけた。長い間、しっかり家を守ってきた母親は、この子のためにすべて資産をなくしてしまったため、娘と泣いていた。男の子はその後、左官屋へ奉公に赴いた。

男の子は大人のような財産観を持っていなかったのが、この作品のポイントなのではなからうか。例えば、家を借りに来た代書人の「生意気を言つてないで、お母さんに手紙を出して聞いとくれよ。」という言葉に対して、「母さんならことわるよ。おらから借りときな。」(p.230)と自信満々に答えた。そして、母親が大事にしていた亡くなった父親の晴れ着をただ同然で売ってしまった。さらに、一人で釣った魚を近所の子供たちに分けてやった。そして、奉公の話が出たとき、母親は奉公に出すぐらいなら二人で田舎へ帰ろうと言い張ったが、男の子はこともなげに「そんなに皆が喧嘩して泣くなら、おらどこへでも奉公するよ。」(p.232)と荷物を片付け始める。これらの行動からは、大人の因習的な財産観、家観念などとは大分相違している。このような男の子のイメージは極めて鮮やかで、大胆不敵の

---

<sup>13</sup> 「故郷」(『時事新報』、1928年6月号。『川端康成全集 第一巻』、新潮社、1983.8)

ようで、家庭・故郷からの解放というテーマにおいては創意的だと言えるだろう。

#### 3.1.4 「離婚の子」<sup>14</sup>

夫婦とも有名な小説家の間に男の子が出来た。そして離婚した。最初はお互いに近くに住んでいたため、子供の行き来にとっては便利であろうが、「折角別れても、お互ひの生活が手に取るやうに想像出来てはね。」「早くお互ひに想像し合へないやうな生活をしませうよ。」(p.298)、「お前の小説が僕の作風の影響を綺麗に棄て去るときが来たら、もう一度一緒になつてもいいね。」「そんな風に改まるのは厭、あなたの必要な時に、私はいつでもあなたの戀人なの。」(p.301)といった対話があるように、二人とも因習や習慣に束縛された人間ではなく、自由自在に生きて行きたいという態度を示している。生まれた男の子は最初のころは、父親と母親の家を行き来していたが、父親が再婚してからは、何の拘りもなさそうに父親の新しい妻を「お母さん。」と呼んで、すぐに親しんだ。しかし、この子はよく、この父親の家に来ては、二三日遊んでから、ふいと母親の家へ帰ってしまうのだった。このようなことがあると、子供に小鳥のように出て行かれた新しい妻はおどおどしていた。そして、「私に健ちゃんを育てさせていただきたい。(中略)私の子供にしてしまつて、あの方のところへ行かないやうにしてくださいませんか？」(p.303)と言うようになった。父親は妻のこのような話に対して、「馬鹿！」といきなり新しい妻を殴り倒した。父親は涙をぼろぼろ流しながら、「あの子は一あの子は、あの女が戀人と一緒に寝てゐる寢臺にだつて、自由自在に飛び上つて行くんだぞ。」(p.303)と叫んだ。そして、広い青空の街へ飛び出していった。

即ち、この何事にも拘らない子供とは反対に、大人はむしろ固定観念にしっかりと束縛されているのだった。例えば、子供に対する占有欲というものである。作中の小説家夫婦の付き合い方は既に一

---

<sup>14</sup> 「離婚の子」(『新潮』、1929年6月号。『川端康成全集 第一巻』、新潮社、1981年)

つの模範を示している。さらに自由自在に成長している子供と「我が家」という因習に拘る新しい妻との対比を通して、万物一如という思想を強調したのではなかろうか。

以上述べて来たように、この「家庭・土地からの解放」というテーマは、日本に来た朝鮮人、澁刺と家出をする馬美人、家庭観念を捨てた男の子、「離婚の子」のような、離婚した親の間に何のこだわりもなく、自由に行き来する振る舞いをした離婚の子たちを主人公にして、家庭や土地への拘りからの解脱を通して、困難な状況から脱し、暫時の安らぎを得たり、自由奔放な生涯を過ごしたりすることが出来るようになるとする解脱につながる解放感や期待感が浮き彫りになっている。

この主題は川端の全生涯にわたって関心が注がれたものである。昭和 37 年に出来た「木の上」<sup>15</sup>という掌の作品もその例である。主人公は敬助と路子という二人の小学四年生である。路子は常に敬助の家へ生垣をくぐり抜けて庭にいる敬助に会いに来ていた。ある日、敬助は松の木の上に隠れており、下にいる路子に登っておいでと呼んだ。路子は最初は怖くて登ることが出来なかったが、敬助に励まされてやっと上に登った。敬助はよく木の上で本を読んだりした。何故木の上に来るかといえば、去年の春に父親が外に女が出来たから、母親との間でひどい喧嘩をした。その喧嘩を見るのが厭だから、木の上に登って隠れるようになった。それ以来、二年が続き、二人は木の上で二人きりの世界を作っていた。「そんなに高くはないのに、地上をまったく離れた世界にみると、小さい恋人たちは感じてゐる」(p.501) た。このように、昭和 30 年代になっても、この「家庭・土地からの解放」という主題がまだ関心を持ち続けられている。これは川端文学の一貫したテーマだと言って過言ではなかろう。

### 3.2 日常茶飯事の因習からの解脱

---

<sup>15</sup> 「木の上」(『朝日新聞・PR 版』、1962.12.1。『川端康成全集 第一巻』、新潮社、1983.8)

### 3.2.1 「夏の靴」<sup>16</sup>

馭者の勘三は町でいちばん綺麗な八人乗り馬車を持っている。ある日、一人のどこから来たか分からない十二、三の少女が靴も履かずに、馬車の後ろにぶら下がっていた。勘三は普段とは違って、何故かこの現行犯を取り押さえることが出来なかった。馬をたいへん愛している勘三は腹が立っていながら、結局少女を馬車に乗せて、少女の目指す港へ馬車を走らせた。が、帰りは少女は勘三の好意を一度断ったものの、勘三に説得され、馬車で元のところまで戻ってきた。そこで、少女は道端に置いている白い靴を履いて、白鷺のように小山の上の感化院へ飛んで帰ったという粗筋である。川端によれば、この作品は子供たちがよく乗り合い馬車を追って来て、後ろにぶら下がるのを見て出来た作であるという。<sup>17</sup>

この作品は家庭からの解放という主題が付けられたり、また、少女のおおらかで、マイペース的な振る舞いが故に、「野性への憧れ」と主題が付けられてもいる。<sup>18</sup>夏なのに白い靴を履いているという理由もあるが、靴を履かないで走った結果、血が出たり、また片一方の靴下を手にもぶら下げて、胸を張って強情に走っているという場面もあるからである。また、もう一つの見所は高貴な少女だろうという勘三の想像を裏切り、少女は結局感化院の出身だという「落ち」が設けられた点である。さらに、少女はおおらかに白鷺のように感化院に飛んで帰った姿もポイントになる。即ち、感化院に対して何の拘りもなく、自由自在に振舞っている様子である。<sup>19</sup>以上の、少女の振る舞いから見れば、「家庭からの解放」、「野性へのあこがれ」と

---

<sup>16</sup> 「夏の靴」(『文章往來』1926年3月号。「白い靴」と題して発表された。『川端康成全集 第一巻』、新潮社、1983.8)。従来の研究のポイントは「対称的表現方法」などの表現方法に置かれているが、例えば、松坂俊夫氏の「対照的描写」という観点。(『夏の靴』論、同注2。p.142)。須藤宏明氏のような「語り」の位相と、勘三の特異性を強調しているのも示唆的な観点だと言える(同注4。pp.95-102)。

<sup>17</sup> 同注8。p.467

<sup>18</sup> 川端自身は「獨影自命」で「野性へのあこがれ」とした。(同注8。p.468)。羽鳥一英氏にもそう見なされた(同注7。p.275)。

<sup>19</sup> 松坂俊夫氏は特にこの創作手法を評価した。「『夏の靴』論」(同注2。pp.137-143)。

いう見方も妥当だと言ってよかろう。しかし、日常生活上の掟や制度概念などの因習に対しては何の拘りもないことが特にクローズアップされたということも軽んじられないだろう。

### 3.2.2 「二十年」<sup>20</sup>

主人公の少年は部落の少女の澄子に惹かれ、力を尽くして澄子を守るようにしてきた。ある日、親の目をごまかしながら部落の少年の梅村に案内され、部落の森に入った。梅村が、竹かごにもぐりこんでいる澄子を岡の上から転がして、麓にいる主人公が澄子を抱き起こすというような遊びをしていた。「自由！」と岡の上と下で合図の声を挙げながら。しかし、この部落の人間との付き合いが主人公の村に知れた。主人公の父親は村人の集まりの末座に座って頭を下げ、「この度は倅が村方御一統の御顔に泥を塗るやうなふしだらを働きまして面目次第もございません。昔ならば打首か久離切つての勘當でございますが、せめて皆様のお目にだけでも障らないやうに中學校の寄宿舎に送ることにいたしましたから、何卒御情をもちまして穩便な御取計ひを願ひます。」(p.79)と詫びた。この父親の謝りように対して、中学二年生の主人公は「人道の賊め。鬼め。人非人め。習俗の幽霊め。俺は死んでも澄子を妻にして見せるぞ。」と心で叫んだ(p.79)が、実際、中国の寄宿舎送りとなり勘当させられるはめになった。

二十年後、主人公は梅村・澄子夫婦と再会した。澄子に「子供の時分が面白うござんしたね」とこともなげに微笑まれた。また、梅村の昇進のことに対しても、「梅村は海軍大學を出て新しい戦闘軍艦に乗組んでゐたが、今は軍令部でいい位置にゐるらしい。しかし、部落出の軍人はどんなに傑れた人物でもある程度までしか昇進しないと云ふやうなことを聞くと、彼は梅村のために憤りを感じた。」(p.79)というように被差別部落びいきの気持ちを顕にした。

即ち、社会や家庭の掟に背いて部落の人間と付き合うようになっ

---

<sup>20</sup> 「二十年」大正14年11月、(『文藝時代』、1925年11月号。『川端康成全集第一巻』、新潮社、1983.8)

たのだ。しかも、澄子という部落の女性も自分の出身や非部落の人間との付き合いに対しては何の陰影もなく、自由奔放な生き方をしている。まさに制度・因習からの解放を追求することを通して、「万物一如」の精神を表わしたと言える。この作品は川端自身の解釈では「野性へのあこがれ」となるのである。<sup>21</sup>この「野性」とは自由奔放を示唆するキーワードとして使われているのは明らかであろう。

### 3.2.3 「雀の媒酌」<sup>22</sup>

大正 15 年に出来た「雀の媒酌」は川端に言わせれば、「なんとなく好きである」という作品<sup>23</sup>である。「彼」は写真の娘と結婚すべきかどうかと悩んでいたのも、姉いごと銀貨を回して、結婚を決めようという遊びをした。相手の娘は自分の運命を父兄に任せているため、かえって、「彼」の方が迷っている自分を醜いと思っていた。したがって、自分の運命を姉いとこの掌の中の銀貨に任せることに、高い喜びを感じていた。「彼」は、縁先の泉水に自分の妻となるべき女がいるのなら、その顔を水に写して見せてくれと頼んだら、ちょうど、交尾しながら二羽の雀が屋根から落ちて、水の面に羽ばたきして二つに分かれ、別々の方角へ飛び立った。その時、一羽の雀の姿が鮮やかに水面に写った。その雀が鳴いた。鳴き声から「迷つてゐるあなたは、現世であなたの妻となる女の姿を見せても信じる事ができないでせう。ですから、来世の妻の姿を見せてあげるのです。」(p.122) というように聞こえた。それで、「彼」は雀に「雀よ、感謝する。来世は雀に生れて、雀のお前を妻とするのなら、私はこ

---

<sup>21</sup> 同注 8、p.468

<sup>22</sup> 「雀の媒酌」大正 15 年 4 月、(『辻馬車』、1926 年 4 月号。『川端康成全集第一巻』、新潮社、1983.8)。この作品に対して、以下のような観点がある。「(川端の)失恋の痛手の克服への願いがそれを求めたもの」(羽鳥一英、同注 7。p.277)、「転生と悟達の思想」(羽鳥徹哉「川端康成と心霊学」『作家川端の基底』、教育出版センター、1979.1。pp.316-317)「マタイの福音書からの影響」(松坂俊夫、「掌の小説—川端文学とキリスト教」、同注 2。pp.93-94)、「普遍的青春の心理」(片山倫太郎、同注 4。p.108)。

<sup>23</sup> 同注 8、p.469。森晴雄氏はこの川端の感想の理由を推察することでは、他人のために犠牲になること及び自我に固執しないことの尊さに気づいたと解釈した(森晴雄『川端康成「掌の小説」論--「日向」その他』、2007.12。p.119)。

の雀をめとることにきめよう。來世の運命を見た者が現世で迷ふまでもないのだ。」(p.122) と言って、写真の娘を結婚相手に決めた。作品の冒頭にはすでにこの思想が述べられている。

人間といふ種族を過去から未来へ傳へるための一粒の種子として、自分を小さく感じることに満足した。人間といふ種族にしたところで、いろんな礦物や植物なぞと一緒にあって、この宇宙に漂ふ一つの大きい生命を支へてゐる小さい柱に過ぎないもので、他の動物や植物よりも格別尊い存在ではないと考へることに同意した。(p.120)

即ち、この作品のテーマは執着心の放下、因習解脱と言えるであろう。そして、川端文芸の重要な思想の「万物一如・輪廻転生」の現れでもある。このように、「雀の媒酌」は人間と他の動物との区別に執着せず、自由な心境に至ることの可能性を語ったのである。

#### 3.2.4 「母国語の祈禱」<sup>24</sup>

この作品は人間の因習からなかなか逃れられない状態を批判したものだとも見てもよかろう。人間が何十年も話さなかった母国語を臨終の間際に、そればかり話しているという粗筋である。例えば、老いた林務官は三、四十年もの間ポーランド語を口にしたこともなければ、耳にしたこともなかったのに、ある日麻酔に落ちた二時間ばかりの間彼はポーランド語でしゃべり続けたり、祈ったり、歌を歌ったりした。また、あるアメリカに移住してすでに五、六十年も経った老スウェーデン人は死の床に横たわっていよいよ息を引き取る時になると、埋もれていた記憶が遠くから帰って来たのか、きまっ

---

<sup>24</sup> 「母国語の祈禱」(『文章俱樂部』、1928年5月号。『川端康成全集 第一巻』、新潮社、1983.8)。この作品についての先行研究は大概以下のいくつかの見方がある。「空想、夢、幻想的」(長谷川泉『川端康成研究叢書 2、詩魂の源流』、教育出版センター、1977.3、pp.7-33)、「人間の因習性に対するあわれみと唾棄」(羽鳥一英、同注 6。p.275)、「美しいものは滅びない」(小林一郎『川端康成研究叢書 2、詩魂の源流』、教育出版センター、1977.3。p.167)、「故郷への回帰」(河上徹太郎『月報八 川端康成全集』新潮社、1960.9)、「登場人物の男女の關係に川端と伊藤初代のこと下敷きにされている」(今村潤子、同注 4。p.139)、「哀れな姿。かつての婚約者で破談になった、伊藤初代の影が主題に深くかかわっている」(森晴雄『川端康成「掌の小説」論--「日向」その他』、龍書房、2007.12。p.48)。

て母国スウェーデン語で祈禱をするのだった。

『母國語で祈禱』するのは、人間が古い因習に身動きならぬ程縛られながら、その繩を解かうとするどころか、その繩を杖柱として生きてゐる心持の一種ではないか。長い歴史を持つてゐる人類は、今はもう因習の繩で木に縛りつけられた死骸になつてしまつてゐる。繩を切り放せば、どさりと土に倒れるばかりだ。『母國語の祈禱』もその哀れな姿の現はれだ。(p.224)

と、『母國語で祈禱』という本の内容を引用しながら、過去二年間付き合つて別れた女性がある男と「彼」がいる場所の海に心中に来たことについて、「死ぬ時まで古い幽霊に憑かれてゐたのだ。僅かに二年ばかり一緒にゐた僕から逃れる力もなかつたんだ。自分で自分の一生を奴隷にしてゐたのだ。母國語の祈禱奴！」(p.229)と男は興奮した。このように、この作品も時代や社会の「転変」に慣れずに過去に執着したことに対する批判だと言える。

### 3.2.5 「家庭」<sup>25</sup>

盲の妻は夫に案内され、新しい家に着いた。妻は最初はまた新しい家に引越したことに對して色々心配したり、小言を言ったりした。しかし、夫に家の中を案内してもらっているうちに、妻は目明きのように健やかに部屋を歩いたりし始めたという経緯が描かれている。

妻は「すっかり馴染んでしまつたと思ふと、また新しい家を見に行かうとおつしゃるのね。盲の者には、古い家が自分の體のように隅々まですつかり分つてゐて、ですから自分の體のやうに親しいものよ。」(p.249)と古い家に未練がある。そして、「また新しい家の柱にぶつつかつたり、敷居につまづいたりしなければならぬの？」というように新しい家に抵抗感を示した。しかし、外が暗いイメージの家は中に入るとだんだん明るくなつてきたり、華やかになつた

---

<sup>25</sup> 「家庭」(『時事新報』、1928年10月号。『川端康成全集 第一巻』、新潮社、1983.8)



りしてきた。ピアノを弾いてから、妻は健やかに歩いて寝室に来た。そして、夫との間に次のような会話が展開された。

「ここはどこなの。」

「さあ。」

「ほんとうにどこなの。」

「とにかくお前の家ではないね。」

「こんなところが澤山あればいいわね。」(p.251)

とある。即ち、妻はすっかり新しい家を受け入れるようになった。しかも、これからはもう古い家にはこだわることがないように変わっていくと最後の言葉は暗示しているように、因習からの解脱という主題が顕著である。

以上述べてきたのが、「夏の靴」の、感化院の少女のおおらかな振る舞い、「二十年」の、部落民の社会の掟への挑戦、「雀の媒酌」でいう結婚相手への拘りからの脱出、「母国語の祈禱」のような母語への執着に対する批判、「家庭」のような旧家に縛られることからの離脱など、これらはすべて、この社会の掟や日常生活におけるルールと常識概念などに挑戦した内容である。

杉浦明平氏は川端の掌の小説に対して、次のように述べた。川端の掌の作品はモーパッサンの短篇のように落ちがついているが、モーパッサンのように人生への深い関心から発しておらず、浅薄感がまぬがれず、読んでしまえばたちまち忘れてしまう。それに、人間が社会で戦って生きていこうとする意志がないため、「人間喪失」の文学だとやや辛辣に見ている<sup>26</sup>。しかし、以上の作品分析から見れば、川端の掌の小説は「人間喪失」の文学だとは決して言えないのではなかろうか。むしろ、生活に緊密に即した、人間味が豊かな作品群だと断言できるだろう。

#### 4.川端の文学理念との関わり

---

<sup>26</sup> 杉浦明平「川端康成」(『増補・現代日本の作家』、未来社、1954.8) pp.220-241

以上の9篇の作品には、人間の様々な社会的、家庭的な束縛から逃げ道を見出そうとする姿勢が明白に見える。無論、これは川端の文学理念との関連性があるに違いない。

#### 4.1 万物一如・輪廻転生

まず川端の特有の「万物一如・輪廻転生」を挙げなければならない。この思想は先行研究にも頻繁に取り上げられたし、筆者も触れたことがある。この仏教の輪廻転生の教えに由来し、日本の「草木国土悉皆成仏」の思想を加味しながら、ギリシア神話などには花物語や動物・植物への転生の伝説があることにも気付いた結果として行き着いた「万物一如・輪廻転生」という思想は、生と死、自分と相手などにおける境界線無くすことを通して、不幸から逃がれることができるという主張である。前述の作品群はこの思想を明白に現わしている。これらの作品には因習解脱を通して、「有為転変」に対抗できるようになる思想が窺える。同じ大正末期——昭和初期の作品の「空に動く灯」<sup>27</sup>と「永生不滅」<sup>28</sup>にも同じ趣旨が見られる。前者からの引用文であるが、引いておこう。

大體人間は、人間と自然界の森羅萬象との區別を鮮明にすることに、永い歴史的の努力を續けて來たんだが、これは餘り愉快なことぢやないよ。人生を空虛に感じる心の大半は、そんな努力の遺傳から湧いて來るのぢやないかしら。(p.112)

後者の「永生不滅」においても類似している概念がある。

個人の死から人間を救出するには、個人と他の個人、一人の人間と外界の萬物との境界線を曖昧に暈すことが一番いいらしい。(p.12)

という主旨である。このように見てくると、上述した掌の小説の作品群はこの「空に動く灯」と「永生不滅」という「万物一如・輪廻

---

<sup>27</sup> 「空に動く灯」(『我觀』、1924年5月号。『川端康成全集 第二卷』、新潮社、1982.12)

<sup>28</sup> 「永生不滅」(『文章俱樂部』1925年1月号。『川端康成全集 第三十三卷』、新潮社、1983.8)

転生」の極意の精神の応用編だとも言える。日常生活において、比較的実践できるものであろう。

#### 4.2 小説における「救済」の必要性

上述した「万物一如・輪廻転生」の思想は川端文学の「救済性」を支える重要な思想だと否定できない。しかし、そのほかに、川端の、小説の在り方に対する主張とも無関係ではない。

川端は小説の現代的意義において、特に強調している点の一つに上昇指向、救済の文学というものがある。川端は大正12年の「七月の小説」という文芸時評で、細田源吉の「雇人」(『太陽』)を取り上げて、その作品の無救済を批判している。

細田源吉氏の小説を読むのは、私には常に苦痛である。作者の取扱い方や見方が、餘りに薄暗くて救ひがないので、助からない気持ちとする。(中略) 細田氏の作品には、人生で下ばかり向いてゐる、小さいぢけた心のじめじめした惨めさそのものが、煮切らない眩きになつてゐる。<sup>29</sup>

また、「ピッパ過ぐ」(大正13年3月)で加能作次郎の「二つの遺稿」に漂っている感傷主義を批判している。

加能作次郎が去年の夏発表した短編小説「二つの遺稿」は、私には、甚だ不満であつた。(中略) 青年を滅ぼしたのは文學である。加能氏は青年達を哀みはしたが、その病源の文學とは何かを深く省みはしなかつた。(中略) この感傷主義に基いた安逸が、作家の生活感情を安易なものとし、認識の狹隘、直覺の缺乏、想像力の老朽、感情の弱小、清澄の缺乏なぞの、現代作家の弱點を招いてゐるものではあるまいか。

(中略) 今日の作家の人生觀は、一般的に云つて、消極的であり、その作品に接すると、我々は精神に缺乏し人文に貧弱な社會に住んでゐるかのやうな寂寞の感を與へられる。<sup>30</sup>

---

<sup>29</sup> 川端康成「七月の小説」(『川端康成全集 第三十巻』、新潮社、1984.3。pp.36-37)

<sup>30</sup> 「ピッパ過ぐ」(『川端康成全集 第三十巻』、新潮社、1984.3。pp.98-99)

このように、川端は作家の消極的人生観、感傷主義を揚棄すべきだと主張する。即ち、一般的に抒情的、虚無的な色が濃いと見なされている川端文学は、実は救済性が中核的な特徴になることも否定できない。むしろ上述した作品群にこそ因習の解脱という手段を通して、常に変化し続けて簡単に把握しかねる人生の限界を突破しようという姿勢が見える。

掌の小説にしても、救済性を求める特色が見える。選集の「掌の小説」の挟みこみの月報には、島木健作氏が次のように述べている。

「(掌の小説は)世間で云ふコントなどとは違ふ。人間への温かな気持ち、直接讀むものの胸に觸れ來る點でも、後年の川端さんのものとはだいぶ違ふと思ふ。心が洗はれるやうな清々しさのなかに、美しく懐かしく喜ばしく悲しい人生を眼のあたりに感じる。(中略)最も長い文學の生命を持つものであらう」<sup>31</sup>という。即ち、川端の掌の小説は、その中から人間への温かな気持ちが読み取れ、心が洗われたという救済的な働きを持っているというのである。筆者は上述した9篇の掌の作品の探究を通して、島木氏のこの主張に賛同以外はない。

#### 4.3 社会問題の捉え方

川端文学の「救済性」を論じる場合に、何故、因習からの解脱を特に強調しなければならないか。それは、川端の社会問題に対する見方とも関係がある。川端は「獨影自命」で「馬美人」を含めた掌の小説の中で、無貞操の匂いのする女が多いことに触れている。自分はそれについて書こうとしたのではない。これは「命の悲哀と自由との象徴」だと言及した。「故郷」、「家庭」、「離婚の子」などの作品も家庭からの解放という趣旨であろうが、「しかし、結婚や家庭を問題として書いたといふわけではない。やはり悲哀と自由との象徴として歌った」<sup>32</sup>としている。即ち、これらの掌の作品から川端は、人間の生き方に対して深い思いやりを持っている。その中で、社会

---

<sup>31</sup> 同注 8。p.479

<sup>32</sup> 同注 8。pp.470-471

議題への関心も存分に伺えると言える。上述の作品群から例を挙げよう

島崎藤村は被差別部落の問題を取り扱った『破戒』という作品を明治 38 年に起稿した。「二十年」は大正 14 年に書き上げられたため、その間ちょうど二十年となる。即ち、「二十年」というテーマは藤村の『破戒』を意識して書いたかもしれない。そして、大正時代にできた一連的な被差別部落の運動も川端のこの「二十年」という作品の誕生と関連があると思う。例えば、「二十年」で「水平社」に言及している。大正時代はデモクラシーが生まれたため、被差別部落の解放運動が始まった。「水平社」は絶対的な平等を求めるという主旨を掲げていた。大正 11 年 3 月に「水平社宣言」が出来、大正 12 年に「全国水平社青年同盟」が結成されたように、当時「水平社運動」は盛んに行われていた。三年後の大正 15 年に第五回の大会が開かれ、軍隊内差別や行政上の差別などを糾弾すると決議された。その後も、たくさんのリーダーが出て来て解放運動を継続している。川端の「二十年」という作はむしろ被差別部落の解放運動の騒ぎの中で出来たのである。ただ、藤村にしろ、川端にしろ、両方とも被差別部落の議題を取り扱っていても、真正面から戦おうとする姿は見えない。

「夏の靴」においては、社会議題と関連している点は感化院のことである。作中の少女は一時感化院を脱出して、また白鷺のように感化院へ飛んで帰るという人物設定であるが、感化院は無論、非行少年・少女、保護者のいない少年・少女、また親権者から入院出願のあった少年・少女などを保護し教育するための福祉施設であった<sup>33</sup>。明治 33 年ごろ感化法が作られ、明治 41 年に一部が改正されてから、各道府県に感化院の設立が増加し始めた。「夏の靴」が書かれた大正 15 年には感化院はありふれた施設になっていたのであろう。

---

<sup>33</sup>「全国児童自立支援施設協議会」:昭和 22 年に「少年救護院」になり、平成 10 年から「児童自立支援施設」と改名された。<http://zenjikyoo.org/home/history/>。  
検索日:2022.10.25

ただ、川端はこの非行少女（あるいは孤児であろう）を美的に造形しているため、当時の未成年者の非行問題などに多大な関心を持っていたとは限らないだろう。「馬美人」では、フェミニズムの匂いがすることも無視できない。また、「海」のような、朝鮮人徴用問題や日本という土地への定住の問題なども川端の関心を引いた議題であろう。しかし、前述したように、真正面から戦おうとする姿は見えない。

即ち、上記の作品からは、川端の社会問題への関心がはっきりと見られるが、川端はこれらの問題に対して出した解決方法は、社会運動などの外的な手段ではなく、当事者の心の働きを通して、内面から束縛を脱却できるような力に頼るというやり方である。川端はこれによって、不自由な環境の中でいかに自分の道を切り開くかというライフガイダンスを提出したのである。それは「因習からの解脱」というノウハウなのである。

## 5. おわりに

以上は9篇の作品についての分析である。この作品群の場面設定は様々である。「母国語の祈禱」と「家庭」と「雀の媒酌」の三つの作は大人の世界であると同時に、恋愛や婚姻関係をめぐる筋書きである。ほかの6篇はすべて子供や少年・少女を主人公にしたものである。ただし、人物設定はほとんど変わった対象が中心となっている。例えば、「二十年」の中の部落の少年・少女、「馬美人」・「故郷」・「離婚の子」・「木の上」の不健全な家庭の少女や子供、「夏の靴」の中の感化院の少女、「海」の中の、祖国を離れて異国に来た少女などである。

テーマとしては、家概念・土地概念・制度概念からの解放なのである。そして、作品全体は多少幽かな哀愁がないとはいえないが、全体はむしろ明るさが浮かんでいるといえる。これはまさしく川端の小説観の中で論及した「救済性」のことであろう。例え、「木の上」という別世界で穏やかな二人の関係が二年しか続かないという内容

であっても、この二年の間は二人にとっては、別世界の和やかな雰囲気満喫したはずである。

更に、以上の作品から見て分かるように、川端文学では、「有為転変」を素直に受け入れるどころか、能動的に「有為転変」の世界を作り出すことに努めているとも言える。周知の如く、川端は幼いころから相次いで肉親に死なれ、また、かつての婚約者の伊藤初代との破談体験もあった。以上のためか仏教にも接近した。これらの体験によって、何らかの有・存在に関わって生きている人間に、有に対する執着を捨てさせ、人間を無の深淵に落とし込み、絶体絶命に追い込んだその先に、真の自由が生まれると主張するようになる。

それは、文学作品の創作においては、様々なモチーフを設けることで成し遂げられた。それは、人間の生にかかわっている因習を解脱させること、さらに、能動的に別離を求めること、最後は、死の脅迫から逃れようとして、禽獣草木の自然界のすべての存在から救われる道を見出したという「万物一如・輪廻転生」思想などに収斂されている。これらの「創作手段」によって、川端文学は非情的、虚無的な雰囲気漂っているようにみえるが、逆に自由で広大な世界が開かれるようになったとも言える。それで、読者に「有為転変」というこの世において、家概念・土地概念・制度概念に対して、より気楽に向き合う力を与えてくれているのだろう。無論、「万物一如・輪廻転生」思想以外に、川端の、小説の意義への迫及と社会問題への関心なども重要な要素だと言える。

## テキスト

川端康成(1982)「空に動く灯」(『川端康成全集 第二巻』、新潮社)

川端康成(1983)「二十年」、「海」、「夏の靴」、「雀の媒酌」、「馬美人」、「故郷」、「家庭」、「母国語の祈祷」、「離婚の子」、「木の上」(『川端康成全集 第一巻』、新潮社)

川端康成(1983)「獨影自命」、「永生不滅」(『川端康成全集 第三十三巻』、新潮社)

川端康成(1984)「ピッパ過ぐ」、「七月の小説」(『川端康成全集 第三十巻』、新潮社)

## 参考文献

- 今村潤子(2001)「『母国語の祈禱』論」(『論集 川端康成――掌の小説』、川端文学研究会、おうふう)、 p.139
- 片山倫太郎(2001)「雀の媒酌」(『論集 川端康成――掌の小説』、川端文学研究会、おうふう)、 p.108
- 河上徹太郎(1960)『月報八 川端康成全集』、新潮社
- 川端文学研究会(1983)『川端康成「掌の小説」研究』、教育出版センター、 pp.2-163
- 黄翠娥(2021)「川端文学における『救済』--関東大震災関連作品をめぐって―」(『台湾日語教育学報第37期』、台湾日語教育学会)、 pp.150-173
- 小林一郎(1977)「母国語の祈禱」(『川端康成研究叢書2、詩魂の源流』、教育出版センター)、 p.167
- 小林芳仁(1985)「川端文学と仏教」(『美と仏教と児童文学と―川端康成の世界』、双文社) pp.85-114
- 杉浦明平(1954)「川端康成」(『増補・現代日本の作家』、未来社)、 pp.220-241
- 須藤宏明(2001)「『夏の靴』論」(『論集 川端康成――掌の小説』、川端文学研究会、おうふう) pp.95-102
- 張月環(2019)『「掌の小説」における川端文学の探究』、致良出版、 pp.14-170
- 長谷川泉(1977)『川端康成研究叢書2、詩魂の源流』、教育出版センター pp.7-33
- 羽鳥一英(1980)「川端康成と万物一如・輪廻転生思想」(『日本文学研究資料叢書 川端康成』、有精堂)、 p.275、 p.277
- 羽鳥徹哉(1979)「川端康成と心霊学」(『作家川端の基底』、教育出版センター) pp.316-317



- 松坂俊夫(1983)「掌の小説――研究への序章」、「『夏の靴』論」  
(『川端康成「掌の小説」研究』、教育出版センター)、pp.2-4、  
pp.93-94、pp.137-143
- 森晴雄(2000)「馬美人」(『川端康成「掌の小説」論--「貧者の恋人」  
その他』、龍書房)、 pp.25-28
- 森晴雄(2007)「母国語の祈禱」、「雀の媒酌」(『川端康成「掌の小説」  
論--「日向」その他』、龍書房)、 p.48、 p.119
- 「全国児童自立支援施設協議会」 <http://zenjikyoo.org/home/history/>